

第 8 号(2009.02.02 配信)

今年「世界天文年」です。新聞の文化面を何げなく開いて知りました。さっそく調べてみました。なぜ今年が「天文年」か、いつどこで決まったのか、私たちはどう関わりがあるかなどを、私の体験にも触れながら記していきたいと思います。

公式(英語)の名称は International Year of Astronomy 2009 です。何年か前に「国際観光年」「国際コメ年」などがありました。公式名称に即し、どうして「国際天文年」ではないのか? ネットで見ると、その理由が記されていました。①(多国間ではなく)2 国間でも成り立つ;②やや狭い印象を与える可能性がある;③このイベントが途上諸国を含め真に世界を巻き込む活動として企画されている;の 3 点です。直訳の「国際」でなく「世界天文年」と呼ぶわけが分かるような気がします。国内の企画には、星伝説の収集や「アジアの星物語」の編集もあります。スローガンが「宇宙:解き明かすのはあなた」。あなたも星探し、伝説集めに参加してみませんか。

今なぜ「世界天文年」か。イタリアの科学者ガリレオ・ガリレイが初めて「望遠鏡なるもの」を作り夜空に向け宇宙を眺め渡したのが 1609 年の末だったそうで、今年 400 年の節目に当たるから。2005 年のユネスコ(国連教育科学文化機関)総会決議を受け、07 年 12 月の国連総会で制定が決まりました。「天文学と基礎科学の持続可能な開発にとっての重要性について世論の認識を高め、天文学という学問が生む刺激を通じて、基礎科学の普遍的知識への接近を促進する」とされています。

堅い話になりました。身近な話に移りましょう。皆さんの大多数は、アジア、アフリカ、中南米、オセアニアなど、それぞれの派遣先・任地で、東京や日本の大都市では到底見られない、星のきらめく群れを見上げて感動した体験をお持ちだと思います。実は私も、初めてアフリカに着任して間もない頃、庭先で涼もうとイスを持ち出し夜空を仰ぎみたら…。空いっぱい溢れるような星の大群に圧倒され、そのまましばらく見ほれていたことを思い起こします。哲学者のカントは「夜空に輝く満天の星」に「畏敬」の念を抱くと述べています。俗人の私は、ひたすら驚嘆して言葉もありませんでした。

山里育ち、海辺育ちならばまだしも、子どもの頃からずっと都会住まいで、暗い夜道を歩き星空から教えられ楽しむ機会が少なかったのも、北斗七星に北極星、オリオン座など見知った星は数えるほど。夜空といえば、子ども心には、十五夜にウサギの餅つきを連想し、竹取物語を聞かされ、むしろ月に馴染みがあったように思います。今は、その月に人類が行けます。七夕をはじめ、星の物語、星座の伝説、星占いなどから、星への憧憬が強いのではないかと。

本題に戻ります。「満天の星」の驚嘆を発端に、仰ぎ眺めるだけでなく、さまざまな星座を知りたい調べたいという願望に駆られました。家族に頼んで星座の本を送ってもらい、さっそく開いてみると…。「ああ、そうだったなあ」とすぐ気づいたのは、日本の夜空、日本の星座が話の中心でした。春から始まり、四季ごとに。それでも、東京では見る機会すらなかった射手座、双子座、乙女座等々、幾つもの星座を自分の目で確かめることができました。日本では見えず、本にも解説がほとんどない南十字星や南斗六星などは、近所の少年や友人たちに教わりました。

赤道の近辺から南半球では、見える星も星座も現地の人たちから話を聞き、現地で探し、教わり、確認していくしかないということです。任地の友人たちと、夜空を仰いで位置や方角を知るの、現地生活の潤いになるのではないのでしょうか。

『星座を見つける』の著書がある出雲晶子さん(注)によると、星座伝説は初めはほとんどギリシャで作られたが、インドや中国でも比較的多く、どんな民族も、偏りはあるものの、月や金星など惑星から、普通の星でも北極星、北斗七星、スバルの三つは、神話・伝説が存在するといわれています。地域や国によって、伝説に特徴があり世界観の違いが分かることも。例えば天の川は、中国では地上の海とつながっていると考え、ミャンマーの一部では雨季と乾季とを分ける境界線、ツングース地方では、英雄がスキーで滑った後との見方があり、ウラル地方では「鳥の道」と呼び、渡り鳥の道しるべだという、いろいろな伝説があるとのこと。さそり座は、中東の国々ではその通りサソリだけれど、ポリネシアでは空にひっかかった釣針とのことだそうで、どんな伝説か、ロコミでも結構、確かめてください。

星物語や星座伝説は多様なはず。皆さんには海外出張や再赴任の機会があるのでは…。かつての任国・任地にご家族で旅をしたり住んでいる方もあります。ぜひ関心をお持ちになり、せっかくの「世界天文年」の企画に参加・応募なさるようお勧めします。

世界天文年の日本委員会事務局は、東京都三鷹市の国立天文台内にあり、Tel: 0422-34-3689、Fax: 0422-34-3800。また「アジアの星の神話・伝説プロジェクト」の照会や連絡先は、「アジアの星」ワーキンググループ(E-mail: eastasia.star.wg@ml.rikkyo.ac.jp)に。

(1月28日記。国際サブロー)

<注> 出雲晶子(いずも・あきこ)さんは1962年生まれ。フリーライター。著書の『星座を見つける』は学研1998年刊、¥1,785、同『あの星はなにに見える?』は白水社2007年刊、¥1,575。なお、国連の国際年は、2009年は「世界天文年」のほか、「国際天然繊維年」(FAO 総会決議を受け)と「国際和解年」(06年12月の国連総会決議)があります。因みに、最初の国際年・世界年は、1957年の「国際地球観測年」でした。